令和５年度入学　総合政策研究科　博士前期課程　一般　1次募集　試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
専門科目	―	園山　土筆 中島　諒人 他	地域学　入門	2011年 P150およびP278より 一部改変	ミネルヴァ書房

岩手県立大学大学院
総合政策研究科
博士前期課程

令和５年度（第１次募集）
入学試験問題
専門科目

志願区分：一般

注意事項：

1. この試験は，10 時 00 分から 12 時 00 分までである。
2. 「始め」の合図があるまで，問題を見てはいけません。
3. 試験中に，問題冊子および解答用紙の印刷不鮮明，ページの脱落などがあった場合には，手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 解答は，黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入しなさい。万年筆，ボールペン等は使用してはいけません。
5. 試験終了後，問題冊子は持ち帰りなさい。

専門科目

注意事項：

1．1から3の3題のうち，2題を選んで解答しなさい。3題解答した時は採点しません。また，選んだ問題番号を解答の最初に明記しなさい。

2．解答は，問題別にそれぞれ別の解答用紙に書きなさい。

3．各解答用紙の所定の欄に，志願区分，受験番号および氏名を記入しなさい。

1 以下の問いに答えなさい。

(ア) 今日，各地のまちづくり・地域おこし等において，芸術・アートをテーマとした取り組みも多く見られる。こうした「まちづくり・地域おこし等」における「芸術・アート」の意義・効果また課題について，あなたの考えを述べなさい。

(イ) 上記を踏まえながら，あなたが芸術・アートによるまちづくり・地域おこしを進めていくとすれば，どのように取り組んでいくか，期待される効果や課題なども含めて論じなさい。芸術・アートにおいても，音楽，絵画，演劇など様々にあろう。どれか1つに題材を絞ってもよいし，複合したものでもよい。

その際に，最初に具体的な地域・都市を設定すること（架空の都市でもよいし，現実にある何らかの地域や都市でもよい）。また取り組みを進める上では，その前後期間に様々な作業や活動が必要となろう（素材の発見・調査，広報，参加者・協力者，各種準備，等）。それらの点も含めて論じることと，上記の投資の回収の観点から，売買目的有価証券の期末評価について取得原価主義に立脚した考え方を論述しなさい。

2 ここ数年，北海道の赤字ローカル鉄道の存続問題に関する報道がよく見られる。以下の文章を読み，①と②で問われている内容について，あなたの考えを，①は200字以内，②は400字以内で述べなさい。

北海道民にとって，鉄道とはどのような存在だろうか。国鉄から分割民営化された当時は全土に張り巡らされていた路線網が，2016年末には，その多くが経営的に自力での維持が難しいことが発表され，廃線が進んでいる。加えて，メンテナンス費用の負担も厳しく，安全な運行も不安視されるようになってきた。

2022年6月には，2021年3月期における区間ごとの収支が発表され，8期連続で全区間において赤字であることが広く知れ渡ることとなった。7月には，国土交通省の有識者検討会が「地域の将来と利用者の視点に立ったローカル鉄道の在り方に関する提言」

をまとめた。

提言では，JR 各社になるべく路線を維持することに努めるよう求めているが，一方で，輸送密度（営業距離 1km 当たりの 1 日の平均旅客数）が 1,000 人を下回るような輸送効率の低い路線については，JR と沿線自治体が協議する場を設けられることになった。

そこで，①今後，北海道の広大な面積をカバーする公共交通網をどのように考えるとよいだろうか。②国，北海道庁，北海道内市町村，JR 北海道，北海道民，それぞれの主体について，置かれている状況をふまえ，担うべき役割や協力関係はどのようにすると良いだろうか。

3 以下の問いに答えなさい。

(ア) 課題文①②の著者は，自身の実践している芸術（演劇）活動が地域にとってどのような意義があるとそれぞれ考えていますか。それぞれ 200 字以内でまとめなさい。

(イ) 以下の課題文①と②を読み，芸術による地域づくりのポイントをあなたはどのように考えますか。課題文でとりあげられている事例，あなたの知っている地域づくりの事例，あなた自身の地域での経験などを踏まえて，600 字以内で論じなさい。

課題文①

劇場にできること

わたしの専門は演劇だ。鳥取市鹿野町の廃校になった小学校と幼稚園を劇場に変えて，10 数人の俳優，スタッフとフルタイムで演劇を軸にした劇場運営を行っている。「鳥の劇場」というのがその名前で，芸術集団の名でもあり，場の名前でもある。わたしたちの活動は，2 つの点に特徴がある。

民間の芸術団体が，自分の場をもち，そこを拠点に「公共の場」としての劇場をつくろうとしている点。稽古場をもっている劇団は多いが，わたしたちの劇場は，そこで作品をつくり上演をする。海外も含めて他の芸術団体の作品も招く。美術，建築など他芸術分野の事業もやる。ワークショップも多く行う。公立の場ではなく，「公共の場」。演劇愛好家というせまいサークルを越えて，広く一般の市民に舞台芸術の魅力を発信し，「いま」，「ここ」で生きていく上での多様な問題に対峙し，芸術の力を社会変革に向けて動員しようとしている。

もうひとつは，活動が地域に根ざしている点。従来，地域と芸術という言葉が結びつくと，それはアマチュア，趣味的という意味だった。プロ，一流は東京という図式。日本では，芸術は商品としての価値，消費的価値しかもたなかった。演劇をただの商品とし

て売るなら，お客がたくさんいる場所でしか生きられない。けれど，いまこそ地域の生活の場に一流の芸術が必要だ。演劇が歴史的に蓄積した力は，娯楽的側面だけではない。情報技術の発達は，生活を便利に効率的にしたが，そればかりで人間は幸福になれない。自分の，他者の「からだ」と向き合うことが必要で，演劇はその入り口になる。そして，芸術表現は日常の生活を支配する価値観を見直すきっかけをくれる。政治，経済，文化の東京への一極集中のなかで築かれた近代化の歴史によるゆがみが，現在，地域で一気に吹き出している。既成の価値観を相対化してとらえることが大切だ。

地域での新しい動きということでいえば，Ｊリーグもある。地域におけるプロスポーツのあり方のモデルを示し，かなり広く認知されている。歓迎すべきことだ。商業，行政の力に主導された一時の流行に終わらせてはならない。人が幸福に生きていくために必要なことは，商品的価値，市場的価値をもつもの以外にもたくさんあって，しかしわたしたちはそれが何かすらよくわからなくなってしまった。それを発見し，育てなければならない。スポーツも劇場も，そのことを忘れてはならない。実践において乗り越えなければならない障害は多いが，日常の中で理念を維持し磨くことこそ最も大切だ。

課題文②

「演劇」による「地域力」の涵養—ボランティアがつくる「八雲国際演劇祭」での取り組み

「演劇」は，人と人のコミュニケーションをさまざまな形で具現して「人間の生きる姿を描く芸術」であり，「社会的な判断力を育成する媒体」として義務教育に取り入れている国もある。だが残念なことに，日本ではそのように理解されてはいない。

わたしの仕事は，「演劇」が多くの人に楽しまれるだけでなく，「演劇の力」によって，感性，想像力，創造性が暮らしの中で活かされ，さらには物事の本質を見抜く「洞察力（インサイト）」が涵養されていく地域をつくることだ。1999 年から 3 年に 1 度開催している「八雲国際演劇祭」には，その目的が内包されている。

国際的な催事開催の絶対条件は，潤沢な予算，交通の利便性，会場・宿泊・食事などの施設，外国語スタッフ，観光・文化資源，ホスピタリティの６つだといわれているが，松江市南部の山里である八雲では，これらを満たすことはできない。

その足りない部分を，企画段階から参加する住民ボランティアが知恵と工夫で補って準備する。東奔西走してファンドレイジングに汗を流す。こんな田舎にようこそと国内外からの観客と演劇人を歓迎する。食堂が 1 軒もないところに 100 席の臨時レストランを作って宗教やアレルギー対応の料理を提供する。言葉が通じなくても身振り手ぶりで気持ちが通じたときの喜びを味わう。地域の祭事に招いて日本の生活文化を伝える。ホームスティで受け入れたゲストがコンテスト受賞する。そして，「こんな人の少ない田舎で，こんなハイレベルな演劇祭があるとは」と驚嘆する参加者の声を聞く。

こういった演劇祭の継続で，400 人のボランティアは自ら気づいていく。準備に徹するだけでなく，やはり演劇も観なければと。そして，原語上演でもクオリティが高ければ感動することを知る。海外作品の独創的で多様な表現に出会って大きな刺激を受ける。こうした 11 年間の体験が人々の暮らしを確実に変えてきた。

この演劇祭は，「住民」「行政」「劇団」から参加したボランティアが，話し合いを惜しまず，準備のプロセスを大切にして開催する。終了後は，丁寧な振り返りによって改善案をつくり，次回のプランを練りあげていく。マンネリに陥らない仕組みづくりだ。

「八雲国際演劇祭」は，地域経済を潤すようなフェスティバルではないが，こういった地中に太い根を張った催事を継続していけば，やがては「地域力」という大樹が育っていくだろう。

（柳原邦光，光多長温，家中茂，仲野誠『地域学　入門』，ミネルヴァ書房，2011 年，p.150 および p.278 より，一部改変）